

令和 6 年 6 月 28 日現在

機関番号：32635

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2023

課題番号：19K02844

研究課題名（和文）戦後の読書指導史に関する研究

研究課題名（英文）Research on the history of reading instruction after World War II

研究代表者

稲井 達也（INAI, TATSUYA）

大正大学・教職支援オフィス・教授

研究者番号：30637327

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：戦後初期は新教育の名の下、経験主義教育の隆盛の中で読書指導は生活指導の一環として、児童生徒の読書生活をつくりだすという考え方の中で学校全体での取り組みが進んだ。『学校図書館の手引』を標準として、読書指導は草創期の学校図書館の活用指導との関連の中で取り組まれることが多かった。しかし、昭和33年の学習指導要領を一つの転換点として、学力向上を目指す系統主義教育の文脈の中で、国語科の読書指導はやや後退した。同時に国語科では読解指導が中心になっていった。また、読書指導は学校図書館の活用指導の中での取り組みが進んでいった。教科の学習指導で図書を活用する調査・研究の読書指導も尊重されるようになっていった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

2001年の「子どもの読書活動の推進に関する法律」の施行以降、学校での読書指導は進み、読書率は改善され、学校関係者には読書に対する社会的な意義が周知されるようになった。本研究は読書を基軸とした歴史研究であるが、本研究を通して、読書指導が子どもの情緒や感性といった情動的な育ちの文脈で意義を認める言説が多くを占めることも分かった。読書は学力向上という教育的な意義が強いことが明らかとなった。読書指導を学校教育の中だけではなく、多面的・多角的に捉えることが大切であり、社会的包摂を目指したグランド・デザインのことで、家庭、図書館、書店も視野に入れながら読書という営みの意義を社会的に位置付けることができた。

研究成果の概要（英文）： In the early post-war period, under the name of New Education, and with the rise of empiricist education, reading instruction was part of daily life guidance, and school-wide efforts were made based on the concept of creating a reading life for students. With the "School Library Handbook" as the standard, reading instruction was often approached in conjunction with instruction on the use of school libraries in the early days. However, with the Curriculum Guidelines of 1958 as a turning point, reading instruction in Japanese language classes took a slight step back in the context of systematic education aimed at improving academic ability. At the same time, reading instruction became the focus of Japanese language classes.

In addition, reading instruction has progressed as part of instruction on the use of school libraries. Reading guidance for investigation and research, which utilizes books in teaching subjects, also came to be respected.

研究分野：国語科教育、学校図書館

キーワード：読書活動の推進 経験主義と系統主義 読解指導 学力向上 情緒や感性 読書のグランド・デザイン
社会的包摂 読書の社会的な意義

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

読書指導は学校図書館との結びつきが強く、学校教育全体を通じて行われるものとして重視されている。国語科の指導の中で読書指導が実践されていても、読書指導は学校の教育活動の全体計画に位置付けられ、主に特別活動の領域として学級活動やホームルーム活動を主軸として推進されることが多い。読書指導については国語科の学習指導要領にも盛り込まれており、国語科として読書指導を行う場合もあるが、その場合も読書単元を設置して教科指導の中で計画的に行われるというよりも、学校の課題として読書率の向上を目指して、全体計画の視点で進められることが少なくない。

特に2001(平成13)年の議員立法による「子どもの読書活動の推進に関する法律」の施行以降、その傾向は顕著になった。文部科学省は年度末に都道府県ごとに子供の読書活動優秀実践校を選んで表彰しているが、実践事例をみると、国語科の読書指導を主軸とした実践は多くはない。むしろ、学校図書館の利活用指導との関連で行われる実践が目立つ。文部科学省の担当は教育政策やその推進を担当する筆頭局の総合教育政策局であり、初等中等教育局ではないことも、読書指導が教科指導とは異なる総合的・横断的な性格を持った取り組みであることを示唆している。

2. 研究の目的

学校図書館活用教育が発展し、国語科における読書指導との間で、それぞれの領域間で知見の交流は見られず、両者は分離的な状況にあるのはどうしてなのか。この背景には、教育の領域的細分化が進んだことや、学習指導要領との関連性、社会が学校教育に期待するものなど、その要因は複雑であると推察されるが、依然として具体的な原因や過程は解明されていない。戦後の読書指導の主要な指導理論を検証し、その意義を明らかにし、読書指導史として位置付けることを目的にしている。

3. 研究の方法

読書指導に関わる著書、研究報告書、教育雑誌等の記事を中心に用いて研究に当たった。特に、学習指導要領の読書指導に関する指導事項、全国学校図書館協議会による機関誌『学校図書館』のバック・ナンバーの読書指導に関する論考を集中的に調査した。

4. 研究成果

(1)戦後初期における読書指導

1947(昭和22)年と1951(昭和26)年の学習指導要領国語科編(試案)は、連合国総司令部(GHQ/SCAP)幕僚部に設置された民間情報教育局(CIE; Civil Information and Educational Section)が主導して、国内の有識者とともに策定された。1947(昭和22)年版の「国語科学習指導の目標」の(七)では、文学の読書材は、国語教科書だけでなく、作文と読み物も範疇にされており、(八)では、新聞・雑誌、さらに、紙芝居を含む。これらの教材や資料は教室や職員室に所蔵するのではなく、草創期の学校図書館の中に集約するという役割が提唱された。1947(昭和22)年版では、読書は国語科の「読みかた指導」に位置付けられており、読書の教養的な面や人間形成の面が重視されている。小学校では、読書を生活習慣の一つとして、読書に向かう態度の形成を重視している。「読みかた」の領域と読書が分化されておらず、国語科の「読みかた」の領域と読書が一体のものとなされている。読書を国語科の重要な指導内容として捉えている。中学校では、読書を楽しむ習慣を身につけることが重視され、また、「よい本」(良書)が奨励されている。読書対象としては「あらゆる文学作品」が示され、読書材は国語教科書に限定されていなかった。さらに、中学校では、読む技術を重視した。文学の領域が設けられ、その中に文学作品の鑑賞を重視した読書が位置付けられ、また、学級文庫と学校図書館につい

での指導が設けられた。1951(昭和 26)年版では、多読が重視され、国語科の読書指導は「読みかた」に収斂された。「精読」での機械的な読解指導への警鐘が鳴らされた。読解指導の意義は認めつつも、読解は方法によっては戦前の教育を継承する旧来の方法論であり、それと対置するものとして、戦後という新しい時代の民主主義的な精神を啓蒙するための重要な手立てとして読書そのものを捉えていたとも考えられる。その理想とは異なり、国語科の指導において読書が切り離されてしまうことへの懸念もあったと考えられる。なお、学校図書館の使い方が示されたが、施設・設備として独立的に扱われる方向性が含まれていた。

(2)戦後初期における阪本一郎の読書指導論

戦後初期の昭和 20 年代は占領期であり、我が国の読書指導に関する施策の基盤をつくった時代である。学校図書館と読書指導は不可分の関係にある。阪本一郎(1904-1987)は、滑川道夫と並び、戦後初期の読書指導を牽引した。占領期の 1948 年には民間情報教育局(CIE)が先導し、文部省より『学校図書館の手引』が刊行された。阪本、滑川らも編纂に関わっている。

1947 年には阪本、滑川、今村秀夫らの有志によって民間教育団体である全国学校図書館協議会(全国 SLA)が設立されている。

阪本一郎が 1949(昭和 24)年から 1951(昭和 26)年にかけて発表した読書興味の発達論は、今も司書教諭課程「読書と豊かな人間性」や司書課程の「児童サービス論」などの教科書で取り上げられることが少なくない。AI 社会や DX 社会といわれるような今日にあって、阪本の読書興味の発達論は批判的に検討され、新たな論が構築されてもよいはずだが、なかなか阪本の考え方を超えるものは現れない。

戦後初期の読書指導を考える視点として、学校図書館の利用指導と読書指導との距離のとりかたによって、読書指導に対する捉え方をみることができる。読書指導と図書館の利用指導を一体として捉える場合もあれば、一定の距離を置く立場もみられるからである。そもそも学校図書館と読書指導は折り合いがよくない面もあった。「読書指導」という言葉に対する嫌悪感や拒否感を示し、「読書教育」とする立場もとる人たちが一定数いた。これは戦前、国家のため国民を善導するという大義名分のもとに進められた中央図書館制度による国民の「読書指導」という言葉と重なってしまうからでもあり、「指導」という言葉に敏感だった。

阪本は、学校図書館を「学校における図書基地(ブック・センター)であるとともに読書基地(リーディング・センター)」とし、物としての図書と行為としての読書とを区別している。さらに、「奉仕機関(サービス・エージェンシー)であるとともに教育機関(ティーチング・エージェンシー)」として捉え、奉仕機関だけである場合は貸本屋と変わることがなく、教育機関であるがゆえに精選された本がある点に意味を見出している。

学校図書館の教育機関としての位置付けを明確にしている点に、阪本が学校図書館を「場所」としてよりも「機能」として重視していることが分かる。

また、阪本は、図書を通して社会に適応することを「図書適応(ブック・アジャストメント)」として重視し、このことを指導するのが「読書指導(リーディング・ガイダンス)」とし、「学校教育全体の重要な新しい課題」として示した。戦前の国語教育が「読書のための学習活動」であったかどうかは慎重に検討する必要があるが、阪本は読書を目的化せず、国語以外の他教科へ広く、さらには生活へと開き、つなげていくという立場に立ち、その概念的な広がりを「読書教育」として捉えている。阪本は、読書教育という概念と一体のものとして読書指導を捉え、両者の理論的合一化を図ることを志向している。阪本は、従来の国語教育についても言及し、「読書指導とよばれる場合には、課外の読み物の指導」であり、「教科書以外の図書を読む指導が読書指導とされた」として、「普通の教師は国語科の指導は一通り熱心にやるが、課外の読書指導はやつてもやらないでも良いのであるから、やる

ものはごく少数であつた」と述べている。ここに阪本の問題意識が示されている。阪本が、まずは教科を離れて読書指導の内容を予め設定し、その後改めて教科に戻して考えようとしたことは、読書指導の曖昧さを乗り越えようとする明確な方法になり得る。

読書指導の全体計画と教科の読書指導に関連性を持たせないと、読書指導が二重構造のまま、わかりにくさを自らの内包してしまうことになる。

(3)昭和 30 年代における読書指導

すでに昭和 20 年代から新教育が学力低下を招いているという批判が出ていた。1950(昭和 25)年の読売新聞朝刊の一面には、「まだ続く学力低下 掛算できぬ六年生 実情 国語もひどい」と題された記事が載った。記事にはさらに「新教育の弊害か 原因」という見出しも載る。全国の都道府県では一部の県を除いて独自に標準学力テストを実施していた。1956(昭和 31)年に実施された文部省全国学力調査の結果を分析した報告書では、読解力が不足していることが指摘された。また、漫画やダイジェスト、その他の軽い読み物を中心とする読書状況への警戒が述べられている。漫画以外の読み物を尊いとし、漫画を下に見るのは、昭和 30 年代に漫画が子どもたちの生活に娯楽として浸透しつつあり、影響力が大きくなったことを意味している。こののち、昭和 30 年代は、漫画が青少年に悪害を及ぼすものとされ、漫画を標的にした悪書追放運動が展開されていくことになる。1958(昭和 33)年の学習指導要領の特徴には、系統主義学習の重視、基礎学力の育成、学年ごとの関連性を持たせた指導計画、発展的な指導などが挙げられる。学力向上を強く意識したものとなっている。基礎学力向上のため、国語科と算数科の時間数が多くなっている。

小学校、中学校ともに、1951(昭和 26)年版学習指導要領(試案)に比して、読書指導に関する記述は少なくなっている。また、1951(昭和 26)年版の第 5 学年に「機械的なくり返し読みは、児童の読みに対して興味を失わせることがある。」とあったような、読解や精読に対する警鐘の記述はみられない。

全国学校図書館協議会の機関誌である『学校図書館』の 1958(昭和 33)年 5 月号は、「読書指導と読解指導」という特集を組み、倉沢永吉を筆頭に阪本一郎、国分一太郎ら 8 人の論考を載せている。

倉沢の「読解指導と読書指導」では、読書は「生活の単位」であるのに対して、読解は生活の単位ではなく、学習単位として読書と読解を明確に区別した。そして、読書を「生活における応用面」とし、読解は「応用のための基礎」と性格づけた。この考え方に立ち、倉沢は「読書教育」「読解指導」というべきであると述べた。そのうえで「いくら読解力が身についても、それを活用する機会がなければ宝のもちぐされ」とし、「切れる刃物も使わなければさびていくように、読解力も読書生活に応用することがないと、役に立ちませんし、力がおとろえていきます。」と述べた。

学力向上の機運とともに、国語科が読解指導を行い、学校図書館の利活用教育と関連させて読書指導を行うというように、徐々に役割が分かれていったと考えられる。このことは単純に国語科で学校図書館の利活用が減少していったことを意味しない。両者を二項対立的に捉えることは難しい。

1958(昭和 33)年の学習指導要領は、読書指導の捉え直しも含めて、一つの分岐点となったと推察する。それは学習指導要領が学力向上を喫緊の課題として読解指導を重点化したというよりも、学力向上という時代の要請によって、国語科としては読解指導へシフトせざるを得なかったとみる方が自然であろう。もちろん読解指導が読書指導への入口の役割を果たしていた面はある。教科書作品との出会いを契機として、他の作品の読書へとつなげていくこともある。しかし、1947(昭和 22)年版と 1951(昭和 26)年版の学習指導要領で示された「読みかた」の領域に位置付けられたような読書指導は後景へと下がり始めた。全国学力テストの導入も大きく影響していると考えられる。また、校内における読書指導の担当者の問題もある。図書館教育という考え方の中では、指導者としては司書教諭が第一に挙げられるが、制度的な問題に起因して、全ての学校に司書教諭が配置されているわけではないので、現実的ではない。言い換えれば、読書指導は国語科の指導に限られることではないので、校

内の誰もが担えるため、グレーゾーン化した面は否めない。

(4)昭和 30 年代以降における読書指導

戦後の学習指導要領を概観すると、教育史的には 1958(昭和 33)年の学習指導要領が経験主義教育から系統主義教育への大きな転換点となっている。道徳の時間が特設され、学力重視に転換するため、戦後の学習指導要領の位置付けを変更し、法的拘束力を持たせるなど、一つの転換点となっている。それは占領期の確かな終わりを象徴し、ようやく日本が米国から自立し、自らの力で第一歩を歩み始めたことを示していた。戦後初期の 1947(昭和 22)年版と 1951(昭和 26)年版に示された 2 つの学習指導要領では、国語科における読書指導は重視され、記述も多かった。経験主義的な教育による学力低下論の懸念を踏まえた 1958(昭和 33)年の学習指導要領を転機として、国語科における読書指導と学校図書館利活用指導の中で行われる読書指導という、いわばダブル・スタンダードの状況が生じた。この傾向は、その後に訪れる高度経済成長期の社会情勢の中で、また、漫画週刊誌の普及やテレビの普及など、メディアの変化も相まって、読書指導は学校教育の表舞台から後退していく。一方で、民間レベルでは、親子読書運動や、全国学校図書館協議会と毎日新聞社による青少年読書感想文全国コンクールなどは、着実に読書指導の成果を積み上げていった。国語科の読書指導と学校図書館の読書指導は、むしろ、グレーゾーン化からダブル・スタンダード化が進んだ。

(5)考察

国語科の読書では、対象となる作品を「教材」や「学習材」として捉える。あるいは、教科書教材の副次的な教材として捉え、読書の対象となる作品は、教材の学習をしたうえでの発展的な位置付けで用いる場合も少なくない。現行の教科書でも「読書」単元で採録されている作品では、他の作品と位置付け方が異なる。扱い方によっては主要教材となり得るが、どうしても副次的な扱い方になりやすい。一方、学校図書館の利活用教育、図書館教育の領域の読書では、対象の作品は図書資料という言い方をする。教材化されていないので当たり前であるが、資料という言葉には、学習資料、読み物資料など、やはり、主要なものとはなりにくい。「読書材」と言い方をすれば「読書のための材料」となる。国語科と学校図書館の利活用、図書館教育との間には読書に対する立ち位置の違いがある。読書指導というものを捉える場合には、学校図書館を学校教育の基盤として位置付けても、教科での学びと学校生活が学校図書館に関連づけられるようにしないと、曖昧でわかりにくいものとなる。読書指導が学校教育全体を通じて行われるという大きな理念は、かえって教科と読書指導とのつながりを曖昧にしかねない。2000 年代に入ってから、学校図書館が読書センター、学習センター、情報センターとしての機能があることが強調された。理念として理解できても、教科の学びとの関連性を示せなかった。2017(平成 29)年告示(小学校、中学校)、2018(平成 30)年告示(高等学校)の学習指導要領では、課題解決能力育成の観点から探究的な学びの導入が示された。これまでの読書習慣の定着や読解力の向上のための読書指導とともに、今後は探究的な学びに生きて働く調査・研究のための読書指導が重視されるようになって考えられる。このことは、生涯学習やリスクリングを見通し、生涯にわたって読書を自己の生活に活かそうとする資質・能力を養うという意義を持つ。

2023(令和 5)年 3 月末に「子どもの読書活動の推進に関する基本的な計画」が公表されたが、これに先立って組織された「令和 4 年度子供の読書推進に関する有識者会議」も含めて、担当は文部科学省の総合教育政策局であって初等中等教育局ではない。

今後、読書は学力向上という狭義の読書指導という意義だけではなく、よりよく生きるための読書生活を主体的に創造するという、いわば広義の読書指導という意義が一層認識されていく必要がある。読書という営みは、社会の変化に即して改めて問い直されていくことになる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計21件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

| | |
|--|---------------------|
| 1. 著者名 稲井達也 | 4. 巻 4 |
| 2. 論文標題 探究学習を考える | 5. 発行年 2022年 |
| 3. 雑誌名 これからの国語教育 | 6. 最初と最後の頁 29-39 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|---------------------|
| 1. 著者名 稲井達也 | 4. 巻 855 |
| 2. 論文標題 「ポストコロナを見据えて、「より善く生きる」を切り拓く 「より善く生きる」を問いとして「いのちの教育」を考える 第2回 | 5. 発行年 2022年 |
| 3. 雑誌名 学校図書館 | 6. 最初と最後の頁 78-79 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|---------------------|
| 1. 著者名 稲井達也 | 4. 巻 856 |
| 2. 論文標題 「ポストコロナを見据えて、「より善く生きる」を切り拓く 「より善く生きる」を問いとして「いのちの教育」を考える 第3回 | 5. 発行年 2022年 |
| 3. 雑誌名 学校図書館 | 6. 最初と最後の頁 77-77 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|---------------------|
| 1. 著者名 稲井達也 | 4. 巻 857 |
| 2. 論文標題 「ポストコロナを見据えて、「より善く生きる」を切り拓く 「より善く生きる」を問いとして「いのちの教育」を考える 第4回 | 5. 発行年 2022年 |
| 3. 雑誌名 学校図書館 | 6. 最初と最後の頁 76-77 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|---------------------|
| 1. 著者名 稲井達也, 畑綾乃 | 4. 巻 864 |
| 2. 論文標題 言葉に親しむ人を育てる 往復メール書簡1: 高校生の読書について考える | 5. 発行年 2022年 |
| 3. 雑誌名 学校図書館 | 6. 最初と最後の頁 82-83 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|---|---------------------|
| 1. 著者名 稲井達也, 畑綾乃 | 4. 巻 865 |
| 2. 論文標題 言葉に親しむ人を育てる 往復メール書簡2: 対面のコミュニケーション 話し言葉と書き言葉 | 5. 発行年 2022年 |
| 3. 雑誌名 学校図書館 | 6. 最初と最後の頁 60-61 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|---|---------------------|
| 1. 著者名 稲井達也, 畑綾乃 | 4. 巻 866 |
| 2. 論文標題 言葉に親しむ人を育てる 往復メール書簡3: 高校新科目「言語文化」の課題と可能性 | 5. 発行年 2022年 |
| 3. 雑誌名 学校図書館 | 6. 最初と最後の頁 74-75 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|---|---------------------|
| 1. 著者名 稲井達也, 畑綾乃 | 4. 巻 867 |
| 2. 論文標題 言葉に親しむ人を育てる 往復メール書簡4: 黙読と音読、朗読 | 5. 発行年 2023年 |
| 3. 雑誌名 学校図書館 | 6. 最初と最後の頁 58-59 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|---------------------|
| 1. 著者名 稲井達也, 畑綾乃 | 4. 巻 868 |
| 2. 論文標題 言葉に親しむ人を育てる 往復メール書簡5:ジェンダー・バイアス | 5. 発行年 2023年 |
| 3. 雑誌名 学校図書館 | 6. 最初と最後の頁 70-71 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|---------------------|
| 1. 著者名 稲井達也 | 4. 巻 869 |
| 2. 論文標題 読書を社会に開く これからめざしたいこと | 5. 発行年 2023年 |
| 3. 雑誌名 学校図書館 | 6. 最初と最後の頁 21-22 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|---|---------------------|
| 1. 著者名 稲井達也, 畑綾乃 | 4. 巻 869 |
| 2. 論文標題 言葉に親しむ人を育てる 往復メール書簡6:高校生が文学を読む意義 | 5. 発行年 2023年 |
| 3. 雑誌名 学校図書館 | 6. 最初と最後の頁 66-67 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|---------------------|
| 1. 著者名 稲井達也 | 4. 巻 854 |
| 2. 論文標題 「ポストコロナを見据えて、「より善く生きる」を切り拓く 「より善く生きる」を問いとして「いのちの教育」を考える 第1回 | 5. 発行年 2021年 |
| 3. 雑誌名 学校図書館 | 6. 最初と最後の頁 82-83 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|---------------------|
| 1. 著者名 稲井達也 | 4. 巻 855 |
| 2. 論文標題 「ポストコロナを見据えて、「より善く生きる」を切り拓く 「より善く生きる」を問いとして「いのちの教育」を考える 第2回 | 5. 発行年 2022年 |
| 3. 雑誌名 学校図書館 | 6. 最初と最後の頁 78-79 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|---------------------|
| 1. 著者名 稲井達也 | 4. 巻 856 |
| 2. 論文標題 「ポストコロナを見据えて、「より善く生きる」を切り拓く 「より善く生きる」を問いとして「いのちの教育」を考える 第3回 | 5. 発行年 2022年 |
| 3. 雑誌名 学校図書館 | 6. 最初と最後の頁 76-77 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|---------------------|
| 1. 著者名 稲井達也 | 4. 巻 857 |
| 2. 論文標題 「ポストコロナを見据えて、「より善く生きる」を切り拓く 「より善く生きる」を問いとして「いのちの教育」を考える 第4回 | 5. 発行年 2022年 |
| 3. 雑誌名 学校図書館 | 6. 最初と最後の頁 76-77 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|---------------------|
| 1. 著者名 稲井達也 | 4. 巻 69 |
| 2. 論文標題 授業を変える探究的な学習：探究的な学習の意義と展望 | 5. 発行年 2020年 |
| 3. 雑誌名 英語教育 | 6. 最初と最後の頁 30-31 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|---------------------|
| 1. 著者名 稲井達也 | 4. 巻 179 |
| 2. 論文標題 読書を通して、リテラシーを高める 実社会・実生活で生きて働く言語能力の育成のために | 5. 発行年 2019年 |
| 3. 雑誌名 LISN | 6. 最初と最後の頁 14-17 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|---|---------------------|
| 1. 著者名 稲井達也 | 4. 巻 5月号,通巻823号 |
| 2. 論文標題 挑戦する学校図書館3 スーパーサイエンスハイスクールの学びをデザインする学校図書館(1) 医学部進学を実現する東京都立戸山高校の取り組み | 5. 発行年 2019年 |
| 3. 雑誌名 学校図書館 | 6. 最初と最後の頁 82-86 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|--------------------|
| 1. 著者名 稲井達也 | 4. 巻 2 |
| 2. 論文標題 次期学習指導要領における読書指導の位置づけ | 5. 発行年 2019年 |
| 3. 雑誌名 これからの国語教育 | 6. 最初と最後の頁 3-10 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|---|---------------------|
| 1. 著者名 稲井達也 | 4. 巻 2月号(通巻842号) |
| 2. 論文標題 国語授業で実践したいこれからの読書活動 語彙力・情報活用能力を育む読書活動 読書生活の創造をめざして | 5. 発行年 2020年 |
| 3. 雑誌名 教育科学国語教育 | 6. 最初と最後の頁 4-7 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|---------------------|
| 1. 著者名 稲井達也 | 4. 巻 4月号(通巻882号) |
| 2. 論文標題 戦後の読書と子どもと:戦後の読書指導史をたどる 第1回 | 5. 発行年 2024年 |
| 3. 雑誌名 学校図書館 | 6. 最初と最後の頁 69-72 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

〔学会発表〕 計12件(うち招待講演 2件/うち国際学会 0件)

| |
|---------------------------------|
| 1. 発表者名 稲井達也 |
| 2. 発表標題 阪本一郎の読書指導論 |
| 3. 学会等名 第 145回全国大学国語教育学会信州大会 |
| 4. 発表年 2023年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 稲井達也 |
| 2. 発表標題 戦後初期における読書指導;学習指導要領と『学校図書館の手引』を手がかりにして |
| 3. 学会等名 全国大学国語教育学会第142回東京大会(オンライン) |
| 4. 発表年 2022年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 稲井達也, 畑綾乃 |
| 2. 発表標題 高校国語科における教科の横断的な学習の構築(1);国語科と美術科の協働的な授業の試み |
| 3. 学会等名 全国大学国語教育学会第142回東京大会(オンライン) |
| 4. 発表年 2022年 |

| |
|-------------------------------------|
| 1. 発表者名 稲井達也,高山美佐,畑綾乃,小川一美,小沢 貴雄 |
| 2. 発表標題 言語文化の学びの系統性をどうつくるか |
| 3. 学会等名 全国大学国語教育学会第143回千葉大会 |
| 4. 発表年 2022年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 稲井達也 |
| 2. 発表標題 これからの学校図書館と司書教諭の果たす役割 |
| 3. 学会等名 岡山教育委員会総合教育センター新任司書教諭研修講座講演（招待講演） |
| 4. 発表年 2022年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 稲井達也 |
| 2. 発表標題 資質・能力を育てる学校図書館活用 |
| 3. 学会等名 高崎市教育委員会学校図書館担当教員研修・学校図書館指導員研修2講演（招待講演） |
| 4. 発表年 2023年 |

| |
|------------------------------------|
| 1. 発表者名 稲井達也,有働玲子,浅田孝紀,畑綾乃,小沢貴雄 |
| 2. 発表標題 語彙力を捉え直す;ことばの教育を考える(7) |
| 3. 学会等名 全国大学国語教育学会茨城大会 |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 稲井達也,小川一美,畑綾乃,小沢貴雄 |
| 2. 発表標題 実社会・実生活に生きて働く言葉の力を捉え直す;ことばの教育を考える(8) |
| 3. 学会等名 全国大学国語教育学会宮城大会 |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 稲井達也 |
| 2. 発表標題 子どもと本を結ぶ : 子どもの発達と読書について考える |
| 3. 学会等名 令和5年度岡山県子どもの読書活動推進連絡会講演 |
| 4. 発表年 2023年 |

| |
|---------------------------------------|
| 1. 発表者名 稲井達也 |
| 2. 発表標題 AI 社会, ポスト・コロナ社会に生きる図書館の役割 |
| 3. 学会等名 令和5年度鹿児島県図書館大会講演 |
| 4. 発表年 2023年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 稲井達也 |
| 2. 発表標題 問いを育て問いを深める探究学習 : 教科等と学校図書館の連携 |
| 3. 学会等名 令和5(2023)年度栃木県高等学校教育研究会図書館部会 中央研修会講演 |
| 4. 発表年 2024年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 稲井達也 |
| 2. 発表標題 学校図書館×新聞：主体的・対話的で深い学びの実現に向けて |
| 3. 学会等名 一般社団法人日本新聞協会第7回NIE教育フォーラム |
| 4. 発表年 2024年 |

〔図書〕 計10件

| | |
|---|-----------------|
| 1. 著者名 岩崎 淳・木下 ひさし・中村 敦雄・山室 和也著，編集，分担執筆者は稲井達也他 16名 | 4. 発行年 2022年 |
| 2. 出版社 学文社 | 5. 総ページ数 8 |
| 3. 書名 言語活動中心 国語概説-改訂版:小学校教師を目指す人のために | |

| | |
|--------------------|-----------------|
| 1. 著者名 稲井達也 | 4. 発行年 2023年 |
| 2. 出版社 東洋館出版社 | 5. 総ページ数 200 |
| 3. 書名 はじめての高校探究 | |

| | |
|---|-----------------|
| 1. 著者名 岩崎淳,木下 ひさし,中村敦雄,山室和也,稲井達也,他 | 4. 発行年 2022年 |
| 2. 出版社 学文社 | 5. 総ページ数 160 |
| 3. 書名 言語活動中心 国語概説 - 改訂版 改訂版 小学校教師を目指す人のために | |

| | |
|--|-----------------|
| 1. 著者名 浜本純逸監修, 幸田国広編集, 稲井達也, 首藤久義その他 | 4. 発行年 2020年 |
| 2. 出版社 溪水社 | 5. 総ページ数 150 |
| 3. 書名 探究学習: 授業実践史をふまえて (文学の授業づくりハンドブック) | |

| | |
|--------------------------------|-----------------|
| 1. 著者名 稲井達也 | 4. 発行年 2020年 |
| 2. 出版社 学事出版 | 5. 総ページ数 120 |
| 3. 書名 子どもの学びが充実する読書活動15の指導法 | |

| | |
|--|-----------------|
| 1. 著者名 稲井達也 | 4. 発行年 2020年 |
| 2. 出版社 学事出版 | 5. 総ページ数 128 |
| 3. 書名 学び合い育ち合う学校図書館づくり 新しい時代の学びのリノベーション | |

| | |
|--|-----------------|
| 1. 著者名 全国学校図書館協議会監修, 設楽敬一、竹村和子ほか編集、稲井達也ほか | 4. 発行年 2020年 |
| 2. 出版社 悠光堂 | 5. 総ページ数 292 |
| 3. 書名 司書教諭・学校司書のための学校図書館必携 理論と実践 新訂版 | |

| | |
|--|-----------------|
| 1. 著者名 稲井達也, 影山陽子, 松崎史周 | 4. 発行年 2019年 |
| 2. 出版社 学事出版 | 5. 総ページ数 76 |
| 3. 書名 高校生・大学生のための読書の教科書 - アウトプット力を高める11のワーク - | |

| | |
|------------------------------------|-----------------|
| 1. 著者名 堀川昭代編著 | 4. 発行年 2019年 |
| 2. 出版社 悠光堂 | 5. 総ページ数 184 |
| 3. 書名 「学校図書館ガイドライン」活用ハンドブック 実践編 | |

| | |
|---|-----------------|
| 1. 著者名 稲井達也 | 4. 発行年 2019年 |
| 2. 出版社 学事出版 | 5. 総ページ数 159 |
| 3. 書名 高等学校「探究的な学習」実践カリキュラム・マネジメント 導入のための実践事例23 | |

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

| 氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号) | 所属研究機関・部局・職 (機関番号) | 備考 |
|---------------------------|-----------------------|----|
|---------------------------|-----------------------|----|

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---------|---------|
|---------|---------|